

演劇的アプローチによる絵本の読み聞かせの一提言(2)

～学生達のリスポンス～

絹 川 文 仁

One guide to reading and performing a picture book in view of one essence of play(2)

Fumihito KINUKAWA

序

筆者は、千葉経済大学短期大学部研究紀要第4号(*1)において「演劇的アプローチによる絵本の読み聞かせの一提言～あかんべノンタンを題材に～」を発表した。筆者の専門のひとつであるオペラや演劇の視点から、絵本の読み聞かせの1マニュアルを提言することをその趣旨としている。幼稚園教育要領等で謳われているところの「豊かな感性や表現する力」「様々な表現を楽しむ」を、絵本の読み聞かせの場面で具現するためのある手助けと位置づけつつ、マニュアルなるものに付きまといがちな問題にも言及し、また、その研究作業にある種の客観性を持たせるために、それらに関わった本学学生達の見解や感想も列挙してそのまとめとした。

筆者の担当した平成20年度の本学こども学科総合演習「でも、引き続きあかんべノンタンを題材としてその読み聞かせを深めていく事を常としていったが、その5回目の講義において上記の拙稿のコピーを全受講生に配布し、それについての考え等をレポートとして提出させた。いわば本研究をより多くの学生のフィルターに通過させてみる事を試みたわけである。本稿では、そのような学生達の見解を提示してまとめていくことを主としつつ、今一度絵本の読み聞かせをどう捉えるべきか、およびマニュアル的なものの位置づけ、ひいては教育や保育の本質めいたものにまで考察していき、本研究の続編とする。

あかんべノンタンを読み進める中途にある5回目の講義で実施したことには、以下のような狙いがある。端的に言って、本講義初回で拙稿を配布したのでは、スタートラインにある学生達に、あまりに押しつけ的なバイアスが無条件ないしは無条件にかかってしまう危険性が避けられなく、以降の講義展開にある種の束縛が蔓延してしまう。これでは、学生なりに創意工夫を施そうとする意欲を減退させてしまうこと必至で、教育方法のイロハにおける明らかな失敗につながる。一方、一通り読み終わった時点では、いろいろな意味

で(特にそのタイミングの意味で)、拙稿において学生達に投げかけようとするポイントが、単なる参考資料程度に陥ってしまう可能性も否定しえないことから、上記のようなタイミングとなったわけである。

尚、昨年度の拙稿は「(序) 絵本の重要性」「本稿の趣旨」「絵本の読み聞かせについての既存の書物」「本論」「結び(学生の見解)」にまとめてあるが、本稿では、そのうち「(序) 絵本の重要性」「本稿の趣旨」についての本年度の学生達の声といったものを列挙していきながら、それらに対する筆者の見解を適宜織り交ぜていくことで、本章を構築していくこととする。

本章

初等教育や高等教育の如何を問わず、教員の専門性を高め、および授業(講義)テクニックの進歩を図っていくには、生徒学生達の様々なリスポンスに対して真摯にアクセプトしていく姿勢の重要性は、今更強調する必要のないことであろう。もっと言うならば、授業の有機的延長とも言える学生達の提出したレポートとの密なコミュニケーションは、教員側にとって、専門研究においても授業運営においても、不可欠な要素なのである。本章は、いわばそういった方向性に今一度力点を置いての報告および考察となる。ただ、本稿ではある客観的データを得るかの如く全学生の全見解を列挙することはせず、あくまで学生達の見解のある種の方向性なり、ある種の特徴的な意見等を概観的に見出しながら、それらについて思考を深めていく事とする。

「絵本の重要性」について

総じて、絵本の重要性について認識ないしは再認識したもので占められていた、と言い切ってよいものがある。きわめてシンプルで率直な述懐と思われるのが以下である。

1, 園生活の中で導入されている「絵本」であるが、子ども達にとって絵本の存在というのは無くてはならない存在だ。私自身、子供の頃は読んでほしいと母にお願いしたものだ。絵本を読んでもらうときは、とても嬉しかった思い出がある。温もりがあったと言ってしまえば変な話だが、母の愛情を感じたものだ。読み終えた後は、再度ストーリーを思い出して頭の中で想像し、あの場面はこうなったらもっと楽しいかな等と小さいながらも考えた。私にとって絵本の存在というもの大きかったのだ。絵本の魅力は、読む人の心を豊かにし、喜びや楽しさを味わえることだと思う。幼稚園教育に絵本が導入されている理由は、保育者のこんな願いから教材の一つとして取り上げられているのではないかと。

2, 私はこの授業を取るまで絵本の重要性はここまでであるとは思いませんでした。なぜなら絵本を読み伝え、幼児はただ楽しむだけだと思っていたからです。しかし、絵本を通して喜びや楽しさ、空想したり想像したり、感動したり、こんなにも絵本から学べることもあるのだなと感じました。そのためには絵本を読み伝える保育者がきちんとした知識を得て自ら楽しみながら読むと、幼児もきっと楽しみながら物語に入れ込めるのではないかと思います。

3, 絵本が子供にとって大切な存在であるということはわかっていましたが、「絵本の重要性」を読み、私が理解していたであろうことは「ただ」「なんとなく」だったと思った。子供は絵本を見ることで楽しさを覚えたり、物語などについて空想したり感動したりしていると知った。子供の成長にとても関係のある絵本を読む保育者は、絵本以上に大切な存在だろう。機械が読み聞かせをしたら…とあるが、その側面だけを取り上げるのなら、もしかしたら人間よりも工夫した読み方ができ、子どもの胸に響くかもしれないと思った。しかし、人間が絵本の読み聞かせで機械に負けるわけにはいかないので、それについてもっと学んでいかなければ、と思った。

4, 絵本はテレビアニメの映像のように動かない。だからこそ、絵本は幼児教育にとって必要であり、重要なのだと思う。幼児教育指導書には「幼児に絵本を読んで聞かせる際には、間の取り方、読む速さ、音量など、内容にあった読み方を工夫する」と書かれているが、内容だけでなくそのときの幼児の状況にあった読み方ができることが一番大切だと思う。著者は、ほぼ永遠に機械が人間を凌駕することはないと確信していると述べている。私はこの言葉に音楽を当て嵌めてみた。ほぼ永遠に機械が作り出す音楽が、人間が表現し作り出す音楽を凌駕することはない。人間は機械にはない「心」を持っているから、機械は人間を超えることはできないのだと思う。私が好きな言葉の一つ「思いは技術を超える」。芸術は技術だけでは、人には伝わらないと思う。心が在るからこそ伝わるのではないかと思います。

上記1～4とも、論理的展開の深さはともかくとして、ある意味での微笑まじさを漂わせるほどに、自己

の経験や思い出を素直に並べながら絵本の読み聞かせの重要性を(再)認識しているといえよう。殊に、3, で「ただ」「なんとなく」といった事は、大方の学生達が有しているようである。だからこそ、そういった程度の気分で過ぎ去りがちになる「絵本の読み聞かせ」に、4, のごとく芸術的価値をも見出しながら、保育教育現場での重要性を体感できることこそ、保育者のみに与えられた輝かしい特権と言ったら言いすぎであろうか。以下の5, 6, は個人的意見をそれなりに一般論にまとめあげたものの代表的な考えとして挙げられる。

5, 何事も情報化し、誰しも手軽に情報を入手できるようになった昨今、子ども達の表現力が懸念されているのはなぜだろうか。それは、テレビや携帯電話、インターネットのあり方が多様化し、手で触れ、肌で感じる経験が減ってきているからだ。保育現場において、こういった時代のもたらすハンディキャップを補う活動が重要視されるのは必至であろう。特に今回テーマとして取り上げられている絵本の読み聞かせは、絵本の世界に入り込むことにより、喜びや悲しみ、高揚感などをかかせることで、幼児の内面の成長を促し、支える効果が期待される。保育者は表現に厚みをもたせ、幼児の心情を刺激するよう努めるべきであろう。

6, ここと数十年の間に、インターネットや携帯電話によるコミュニケーションが盛んになっている。しかし、これらの機械類が人間の生のコミュニケーションを超えることはないということには賛成である。便利さ、速さ等を考えれば機械類の方が優れている面もあるが、コミュニケーションの基盤は、伝えるものの心であり、その面においては、人間の生の声の方が優れていると思う。絵本の読み聞かせに関しても、幼稚園教育要領に書かれているねらいを達成する意味でも、やはり人間の生の声が必要となってくると考える。

いずれも、高度に機械化されたコミュニケーションの手段と「手で触れ、肌で感じる」「伝えるものの心、人間の生の声」を対峙させ、後者の重要性を訴えてみせている。それはそれで全くその通りなのだ。が、講義でも筆者はそれなりに連呼してみせたつもりのだが、こういったあまりにわかりやすい対立的議論というものには、そのわかりやすさと裏腹に、振り子的な現象や結論に振り回されるという危険性がつきまとうものだ。その根拠は本稿の骨子のひとつを形成するゆえ詳細は後述するが、例えば保育教育現場でも時折垣間見られる「コンピューターをかなり積極的に導入する学校もあれば、ほぼ否定してかかる学校もある」「ピアノ個人レッスンを時間外保育でまで実践する幼稚園もあれば、保育からピアノを完全に排除して(心が伝わる)歌だけを用いる保育園もある」といった余りの

両極端な状況が当たり前になってしまう。無論、「自由」という価値や主義からは問題なしなのであろうが、では教育や保育の本質をどれほど掘り下げての結論なのかと疑問を呈した場合、かなり疑わしいものが透けて見えるのだ。即ち、各々の現場の現実的（特に経済的、人事的）側面に迫られてそうせざるをえない雰囲気、筆者の知るところでは伺える。決して自慢して言うわけではないが、前稿で結論づけてみせた、ある特定の側面でのコンピューター等の活躍と絵本の読み聞かせ等による保育のコミュニケーションを総合的に見渡していくといった、いわば複合的な視野を継続的に維持させていくことこそ肝要なのである。

さて、少々異質な個人的体験をユニークに記述してあるものが以下の7, だ。

7. 私が行った実習園で一つのクラスがラジカセを使ってCDの中に入ってある音読の本を子どもに聞かせながら、それに合わせて本をめくり、先生はあんまり話さずに本をめくるだけだったのを見た。そこから、先生が述べていたように、機械で読んでいた方が効果音等でその場の絵本の雰囲気は良く出たと思うけど、その空間には子どもと先生のコミュニケーションはなく、ただ本が読まれていくのを淡々と進んでいるだけで、違和感を感じた。だから、コンピューターやCDのように人では表せない効果音を入れられる点には利点があると思うけど、読み聞かせの中で絵本の世界だけでなく先生と子どもがコミュニケーションを取りながら読んだ方が楽しさも出るし何よりも子どもが物語で感じた事を分かり合えたりするから人間が読んだ方が良いという意見は良くわかった。

話が脱線するようだが、その前後の保育活動の検証を経ないまま、迂闊な判断はできないものの、上記の事例に驚きは禁じえないものがある。単純に言って、「読み聞かせ」を機械にまかせて、保育者は殆どページをめくるに徹するという事実は、保育者の資質を半ば放棄したと受け止められかねない。それまでの保育活動の中で「敢えてこの絵本だけは機械に読み聞かせをまかせていく」といった種類の計画性が伴っているのなら、ある評価は得られようが、上記にはそういった記述が見られない（某かのそういった説明があれば、この学生の弁に少しでもにじみ出てくるものではないだろうか）ので、こういった事実が保育現場に存在する事に対して、教員保育士養成機関に籍を置く筆者は、色々な意味での慎重な対応が迫られよう。

以上、「絵本の重要性」については、大方、各々の学生なりに認識していることは確認できた。ところが、繰り返しになるが、安易なまでにコンピューター等と

対峙させたままの平板な議論が多かったことが否定できない。少なくとも筆者が再度力説しておきたいのは（結論といっても構わない）、コンピューター等の至極利便性の高い機械と、絵本の読み聞かせ等の有機的コミュニケーションを、いかにうまく保育現場等に（TPOに応じながら）織り交ぜていくか、という複眼的姿勢を継続的に持ち合わせていくことがポイントということだ。これは、抽象的な観念論に過ぎるという批判を受けるかも知れないが、それこそ現実的に考えた場合、絵本の読み聞かせひとつ取っても、前述のように多様な様相がある以上、薄っぺらい現実論や具体論よりも、強固な観念論を有している方が、遙かに現実的な対応が（慎重に且つじっくりと、といったふうに）可能になる場合も多々あるのである。

「本稿の趣旨」について

少々おこがましい物言いになるが、マニュアルという言葉の意味合いをそれなりに説明付けながら、半ば挑発的に提言してみせた事が、結構な熱気を帯びた反応をもたらしたようだ。ある典型的な例といえるものが以下の1, 2, だ。

1. マニュアルという言葉に対しては、私は最近まで抵抗があった。他人の考えたものを、そのまま取り入れて行うということが、自分の意志、考えがないことだと思っていたからである。しかし、自分の意志、考えが持てない者、もしくは経験が不足している者に、自分流でやりなさいということは無理な話である。もし、自分の考えが、ある者が自分流に何かを行ったとしても、それは一か八かの手段になってしまう。試してみることに、まずやってみることは大切であるが、マニュアルによってある程度の力をつけてからでも遅くはない。このようなことから、マニュアルを作るということは賛成である。大切なことは、マニュアルをたったひとつ作るのではなく、いくつものマニュアルを作って、状況に応じて使い分けること、また臨機応変に微調整をできるということだと思う。

2. 本稿の趣旨の項で、マニュアルがよくないとされているけれど、初めてやることには大なり小なりマニュアルに頼らざるをえないという意見を読んで、私もその通りだと思った。マニュアル通りにやることはよくないと言われているけど、最初から自分なりの表現ができるとは思わない。まずは真似をして様々な方法を経験をして、そこから自分なりの表現ができるようになっていくのだと思う。しかし、いつまでもマニュアル通りにやるのではなく、あくまでも最初だけである。授業で先生が言っていたように、様々な表現ができるようになって初めて、あえて表現しないということができるのだと思った。

詳細は後述するが、いずれにしてもマニュアルなるものを決して一面的に否定したり、或いは肯定することなく、場面やタイミングに応じて取捨選択しようような姿勢を築くべく、多面的な認識を筆者は求めたのであり、細かい論理展開はともかくとして、1, 2, ともその緒にあるといえよう。そういった点においては、内容として決して間違っはならず、正直で素朴な視点は評価するものの、大学生としての相応しいレベルとしても、もう少し論理なり、脈絡なりを発展させてほしいレポートが以下のように少なからず見られたのは、筆者の今後の教育的課題となつてこよう。

3, 論文に書かれている通り、台本のセリフにおけるちょっとした「間」にも、登場人物の何らかの心理が描写されている、と総合演習の講義を重ねていく度強く思うようになりました。幼児に絵本からたくさんを感じ取ってほしいのならば、まず読み手が絵本の内容を深く知っていくことが必要だと思いました。「この時登場人物はこう思っているだろうから、少し声を小さく、低くして読もう。」など読み手が考え、意識することが大切になるのだと思いました。

4, オペラや演劇の中に些細な休符にも大きな意味が宿っており、台本のセリフにおけるちょっとした「間」にもとても多く、絵本をみると文と文との間に「間」がある。間は意図もなく空いているわけではない。書いてある人なりの思いがその「間」につめこまれているのだと思う。だからその思いを考えつつ読んでいくことはとても大切だ。また、本の読み聞かせをするには、たくさん読み方を練習することで自分なりにどれがベストなのかを知っていると思う。経験がないのに最初から同じ読み方ばかりでは自分の学びにはならない。力量もあるけれど自分なりにいろいろと試して読んでいくことが大切になってくるのではないかと思った。

5, 読み聞かせをするにあたって、私は今まで読む速度や声の大きさ、雰囲気気に気をつけていました。しかし間の取り方や内容に合った読み方を工夫することはとても大切なことだと思った。年齢によってもねらいは様々で異なってくる。私は今まで某かのマニュアル的なものに頼っていたように思う。そのマニュアルの中で自分なりの工夫を加えていくことが大事なように感じた。

6, 「物事の初期段階では、先達によるきちんとしたマニュアルを学び、それがあつたレベルに達し始めたら少しづつマニュアルを超えた自分なりの創意工夫を加味していく」という部分ではとても共感することができました。初めから高いレベルで行うのではなく、低いところから徐々に段階を踏んでいくことが大切だと感じました。このことは絵本の読み聞かせだけでなく、保育することの全てにおいて必要なことだと思いました。

他方、以下に挙げるものは、あるひとつの建設的、

或いは複合的視点を有したレポートとして、ある水準に達したものと評価しえよう。

7, 「敢えてマニュアルと位置づけた」という言葉が印象的であつた。私は、教育技術、教育方法にはマニュアルが必要だと感じるからだ。絵本の読み聞かせも一つの教育技術だろう。これらマニュアルから学ぶことをスタートとしないと、決して授業の腕はあがらないと思う。「守・破・離」という言葉からもこの事はよくわかる。まずは、師の教えを忠実に「守」り、段々とその中で教えを「破」り、最後には師から完全に「離」れ、自分の色を作っていくのである。教育者にとつても、この過程が大切になってくるだろう。これから教育現場に立とうとしている私達にとって、まずやらなければいけない事は、何も無いところから我流をつくっていくのではなく、より多くのマニュアルを知り、吸収していく事だろう。その先に、自分だけのオリジナルがあるように感じる。

7, の何が建設的であり、複合的であるかということ、この学生なりに「守・破・離」というフレーズをメタファーとして用い、それを段階的に説明しているところだ。あっさり言って、このような視点は社会の全ての事象を認識するにあつての必要条件と断言でき、殊、教育においては最も重要な視点ともいえよう。端的に言って、それなりの数の多様な生徒に対して、ある教育目標の達成を施し、促していく事こそ～決して楽な作業ではないのだが～複合的建設的作業そのものであり、教育者たる者、いかなる教育的場面や事象に対しても、同様な視点が継続的連続的に求められるのである。また、少なくとも筆者から見ても、マニュアルについての本質的な説明をシンプルに施した学生もいた。その学生が好きな音楽に喩えながら述べたのが以下の8, だ。

8, 自由な表現をするためには、一つ一つの確立したマニュアル的な表現方法、奏法をマスターしなければならない。それをせずに、ただがむしゃらに自己満足の音楽をしていては聞き手は満足できないであろう。これは、絵本の読み聞かせでも言えることである。

この8, は、筆者が前稿(*1)にて「人間は何事でも初めてやる場合は、大なり小なりマニュアル(的なもの)に頼らざるをえない」「物事の初期的段階では、先達によるきちんとしたマニュアルを学び」と述べたことを、この学生なりの体験から換言してみせたといつても差し支えないであろう。

さて、マニュアルという言葉に対して、良きにつけ悪きにつけユニークな考えを披瀝してみせたものもいくつかあるので、それらを挙げながら今一度考察し

てみたい。

9. 私がこの大学に入学して、まず絵本の読み伝えを人前でやろうとした時、お手本にしたのは先生の読み方だった。これは一つのマニュアルの形だと思う。文面に記された物ではない、むしろ実際に見て感じた物を今度は私が表現するというのは文字で読み取るよりはるかにたやすい。マニュアルは確かに必要だと思う。何事にも基盤（マニュアル）が十分にできてから、その後の表現をどうするか、抑揚を付けて読むのか、淡々と読むのかはもちろん本人次第だ。この基盤ができなまま先に進んでしまうと、内容のうすっぺらいものになってしまうと思う。筆者のように演劇のようにするのはやり過ぎだと思うが、子ども達を引きつけ、魅力あるものにするための技術は必要だと思う。

10. マニュアルの話より、マニュアルとは物事の基準となるものだと私は思いました。マニュアルが何故あるのかと言う人もいるかもしれないが、マニュアルがあることで何をしても良いのか、してはいけないのか、何故だめなのかなど考える事が出来ると思えました。基準となるものがあるから、批判が出たりする。人の考える場をつくってくれるマニュアルはあっていいものだと思います。

11. マニュアルを提示していくことを試みているが、幼児は、文章よりも絵に興味をひかれ、絵から内容を理解しているし、コミュニケーションの一環として絵本を取り入れるとしたら、マニュアルを意識してしまったら、かえって、上手くコミュニケーションを取れないのではないかと思った。

面白いことに、9. ではマニュアルを「基盤」、10. では「基準」と位置づけている。ある新鮮な息吹と謙虚さを感じ、維持しつつ、今一度言葉の意味を吟味したい。

・マニュアルを字引で調べると「①手の、手動の、の意。特に自動車で、変速装置が手動式であること。②手引き、便覧、取り扱い説明書（*2）」「①手引き、取扱説明書。②手動（*3）」「手引き。便覧。（*4）」とある。同様に、基盤＝「物事を支えるよりどころ。物事の土台。基礎。基本（*2）。」「ものごとの土台となるもの。（類義語として）基礎・基底・基本・根底・根本・もと（*5）」「問題とするものの根底にあり、それがしっかりと築かれ、安定していることによって、進歩・発展が可能になる何ものか（*6）。」「基準＝「ものごとの基礎となる標準。比較して考えるためのよりどころ。（*2）」「①（くらべるとき）もとになる標準②最低それだけは満たされていなければならないとする、一定の水準。（*7）」「何かを比べるときに、よりどころになる一定のもの。②最低それだけは満たされていなければならないとされるきまり。（*8）」となる。以上から、平易に換言するとマニュアルは「何かを実

施する場合の、ひとつのやり方、方法」なのであり、対して基盤は「物事の基本、土台」、基準は「物事を比べるときに頼るもの、最低限何かが満たされていなければならないもの」で、マニュアルはあくまで「方法（のひとつ）」で、基盤や基準は「物事の基礎や水準」を言っているのである。ただ少しだけ広義に捉えていくと、ひとつの手だてとしての「あるひとつの（有効な）マニュアル」を「あるひとつの基盤、あるいは基準」として、他の「マニュアル」と比較していく事等は、日常いくらかでもあることなので、そういった意味では、辞書の原義だけに必要以上にとらわれることは現実的ではない。上記9. 10. を述べた学生達には、そういった次元のところまで踏み込んだ説明が欲しかったと感じるのは、筆者だけであろうか。話は飛躍するようだが、いずれにしても、学生側も教員側も高等教育に身を委ねる者として、この種の緻密な分析は決して不要でないばかりか、これから社会に飛び出て（おそらく）多様な困難に遭遇していくだろうからこそ、それに関わるだろう言葉のひとつひとつをその原義と見比べつつ、じっくりと認識していく事にこそ何らかの本質的な打開策が見えてくるだろう事を忘れてはならないのである。一方、11. の考えは、あるマニュアルを扱うにあたってのひとつの初歩的次元では、同情に値するものだ。いわば、あるマニュアルが教師や保育者にしっかりと身に付いていない場合は、当然その不十分さに翻弄されてしまい、子どもや生徒たちとのコミュニケーションどころではなくなってしまうのは必至なのである。ゆえに大事で有効なマニュアルと見なされた場合に、教師側は生徒たちとのコミュニケーションが不自由にならないレベルにまで、きちっとそれを身につけなければならないのである。この学生にも、こういった段階まで言及しながら、マニュアルなるものを（やはり）多面的に考えてほしかった。

前項「絵本の重要性」のまとめとも共通してくるのだが、マニュアルなる言葉をどれほど多義的、多元的にとらえてみせられるか、が、「本稿の趣旨」の学生達の反応に対する筆者の提言であり、あるひとつの結論ともいえる。少なくとも段階や場面に応じたポジティブ・ネガティブな側面、一長一短を常に踏まえていこうとする姿勢こそが、高等教育を経て保育や教育の仕事に従事しようとする者の、継続的な必須条件なのである。

結び

次稿では、引き続き「絵本の読み聞かせについての既存の書物」以降についての学生達の反応を開陳しつ

つ、考察を進めていく。ただ「結び～学生達の見解」については、教育的配慮と本研究の主旨等々兼ね合わせた結果、次稿では言及しないこととする。

また予めことわっておくが、本稿は中間報告なのだが、次稿においても筆者が主張したいことと通底している。結局のところ、言葉の用い方、なのである。本稿の末尾ながら、この問題について、鋭い視点をもとに見事に達観した著述があるので、それを紹介することによって本稿の結びとさせていただく。大袈裟でも何でもなく、筆者にとってのバイブルともいえるもので、機会があれば是非学生達にも伝えたいものだ。

「作法 社会は巧みな言葉づかいの上に成り立つ社交体である 人間の活動はなべて言論によって組み立てられる。それゆえ、自由（あるいは平等、博愛）と規制（あるいは格差、競争）のあいだの平衡としての活力（あるいは公正、節度）は、結局のところ言論によって、さらにいえば言論に平衡をもたらしものとしての言論のルールによって、実現されるとみるべきである。そして言論のルールの具体的な在り方が言葉づかいのマナー（作法）とよばれるのである。マナーが形式として与えられても、その内容は「時と所と場合」によって異なってくる。たとえば「年長者の経験には敬意を払え」というマナーにしても、経験とは何か、敬意とは何かと考えていけば、その内容は未定といわざるをえない。したがって「年長者の前で臆することなかれ」という形式も成り立つのである。しかしマナーを言葉づかいの平衡のとれた在り方ととらえれば、まず言葉づかいはつねに形式と内容とが一体となったものとして存在し、次に、たとえ不文律であったとしても、「時と所と場合」に応じた言葉づかいの微妙な使い分けについて、人々はおおよそ共通の了解を寄せているものなのである。たとえば、目の前の年長者が自分の体験を鼻にかけて「最近の若い者はなっとらん」といいつつふんぞり返っていたとしよう。そういう場合には、若者のほうが「そんなことおっしゃいますがね」といささか乱暴に抗弁したとてマナーはずれでないことを、大概の人たちが了解しているのである。逆に、どう考えても深刻な体験をしたと思われる老人がその体験について言葉少なであるような場合には、言葉や表情を用いて、「さぞかし大変だったでしょうね」と表現するのが若者のとるべきマナーである、そのことに多くの人々が同意しているはずである。経験への敬意という形式的要請にたいする具体的反応は、「時と所と場合」に応じた言葉づかいとしては、乱暴であったり丁寧であったりするということである。伝統は、慣習という制度は、実体（サブスタンス）であるよりも、それに包蔵されている国民精神の平衡感覚をいかに表現するかについてのマナー（方法）である。そのマナ

ーは、ひとまず表現の形式（フォーム）ということであるのだが、しかし「状況に応じた言葉づかい」とは、形式と実体が結合されたものである。つまりマナー（作法）については、一般的には抽象的にしか語りえないのであるが、特殊な状況が与えられれば、具体的に規定しうるのである。変化の少ない社会であれば、「時と所と場合」が固定されがちとなるので、マナーにおける形式と内容が一对一の対応に近づいていくであろう。そこではマナーを具体的なヴァーチュエ（徳目）の体系として表すことも可能になるであろう。しかし現代におけるような絶えざる変化にさらされている社会では、徳目の具体化は困難になる。そのことは認めなければなるまいが、しかし、現代社会とて言論（会話や討論）にもとづいて家族や学校に始まり職場や地域を経て議会や国際会議に至るまでが構成されていればこそその社会である。そうならばそこに言論のマナーが息づいているとみてかまわないのである。社会は、マイケル・オークショットがいったように、技術によって形成される普遍的な「世界体（ユニヴェルシタス）」であるよりも、言葉によって成長していく「社交体（ソキエタス）」である。社交は巧みな言葉づかいを必要とすることを忘れてはならないのである。（*9）」

引用文献

- * 1 千葉経済大学短期大学部研究紀要第4号 71～87 (2008)
- * 2 広辞苑 第5版 岩波書店 (電子辞書・2002)
- * 3 三省堂現代新国語辞典 第6刷 1182 (2000)
- * 4 新明解国語辞典 第5版 三省堂 1327 (1997)
- * 5 * 3の270
- * 6 * 4の328
- * 7 * 3の261
- * 8 * 4の318
- * 9 学問 西部邁 講談社 第1刷 139～141 (2004)